

# かつ井とプロ野球

井口昭久

名古屋のタクシートの運転手は、みんな中日ファンである。野球評論家でもある。

東京からの帰りにタクシーに乗って、行き先を告げて、「今年の中日は強いね」と言う。と、運転手が答えた「まだ始まったばかりですからね」。私は言い返した。「でも、トッブだよ」「140試合あるからね、まだ順位をいう時期じゃないと思いますよ」「5つ勝ち越してるよ」「勝ち越しの数は問題じゃないですね。一つ一つ勝たなきゃね」「昨日は岩瀬が打たれたね」「岩瀬だって打たれるよ、高木さんいつも岩瀬を出しやいいいっててもんでもないのに、もうちょよつと、頭を使わなきゃ！」運転手は、次第に興奮してきた。そし

今でもかつ井は特別な食べ物だ。巨人が負けると高校の先生のご機嫌が悪かった。巨人が勝つと、生徒が意味もなく褒められた。私たちは巨人に勝って欲しかった。

名古屋へ出てきてからは中日ファンになった。大学生の時、中日球場でアルバイトをした。カレライスを食べさせてくれるのが嬉しかった。ファールフライを観客が拾ってしまいう前に捕まえてグラウンドへ投げ返すのが、アルバイトの役割であった。その頃は観客がボールを貰えなかった。私は土足で観客席の上を走って観客に叱られた。

今年、高木監督になって、大丈夫かな？と思った。70歳を越えた権藤もコーチになったそう。多くの国で年金の支給を開始する年齢が65歳なので、老人の定義は65歳以上ということになっている。TVを見ていて、中日が勝っているときには、高齢者軍団は素晴らしいと思う。

それにしても、と思う。あんなに大勢の人

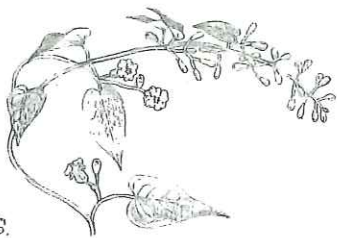
で、「ところでお客さん、どこへ行くんだっただでしょうか？ どうやって行きますかね？」君は運転手が本職じゃないのかね、と言いたかったが言わなかった。

私の父親は巨人のファンであった。高校の先生も巨人ファンであった。私の育った信州の田舎のラジオは巨人の野球だけ放送したので、みんな巨人ファンであった。母親は野球のルールが分からなかった。「巨人の人と、中日の人と、どっちが悪い人？」と聞いた。父は巨人が攻めているときだけラジオを聞いた。テレビが町の食堂に置かれていた。父に連れられて電車に乗って食堂へ行った。かつ井を食べながら野球中継を見た。私にとつて、

がスタジアムに集まって勉強もせずに時間を潰している。最近、勉強をしない私は、勉強していない集団が存在していることに、ひとまず安心する。試合が終わる頃、中日が負けそうになると、チャンネルを変える。

翌朝の新聞で、中日新聞では負けとあるが他の新聞では勝っているのではないかと、密かに期待するが、やはり年寄りの軍団はだめだと落ち込む。それにしても、中日が負けると、自分がしかした不祥事ではないのに、俺は何にも関係ないのに、何故にこれほど不愉快になるのか。

もう、中日なんかどうでもいい、と思ってみたりする。



S.

井口昭久 1943年長野県生まれ。名古屋大学医学部卒業後、同第三内科入局。愛知医科大学講師などを経て'78年ニューヨーク医科大学留学。'93年名古屋大学医学部老年科教授。名古屋大学医学部附属病院長を経て現在、愛知淑徳大学教授、名古屋大学名誉教授。『鈍行列車に乗って—医者人生ソロソロ帰り道』(風媒社)など著書多数。